

あすかでらせいほういせき 飛鳥寺西方遺跡

はじめに

飛鳥寺西方遺跡は、飛鳥寺旧境内の西側に広がる遺跡です。『日本書紀』によると、飛鳥寺西の槻樹の下では大きく歴史が動いたといわれています。壬申の乱（672年）では軍営が置かれたほか、蝦夷や隼人などの辺境に住む人々を招いて饗宴も行われました。大化の改新（645年）以前では、中大兄皇子と中臣鎌足が蹴鞠を通して出会ったのもこの飛鳥寺西であったといわれています。このような記述から、飛鳥寺西方には飛鳥時代の歴史の舞台となった“槻樹の広場”があったと考えられています。

この調査は、飛鳥寺西方遺跡の規模や構造を明らかにすることを目的とした範囲確認調査です。飛鳥寺西方遺跡の発掘は今回の調査で8年目になります。今回の調査位置は、飛鳥寺西門跡から南西に約60m、入鹿の首塚から南に約40mの位置にあたります。調査地周辺では飛鳥時代の遺構が多数確認されており、調査地の北側で行われた平成24年度調査では、調査区一面に砂利敷が確認され、石敷広場であることが判明しています。今回は、調査区を2箇所に分け、それぞれを1・2区と設定して調査を実施しました。

主な検出遺構と出土

今回の調査では、1区で石組溝と土器集積遺構、2区で石列を検出しました。

石組溝は、1区西側で検出しました。幅110cmにわたって敷き詰めた底石とその両側に側石を立てた溝状の遺構です。この溝は深さが約10cmで、一石分の深さしかありません。溝の方位はほぼ正方位で、北でみて西に約5°振れています。この溝は平成24年度調査で確認された砂利敷面と同一面で造られており、飛鳥時代の遺構と考えられます。

土器集積遺構は1区で2箇所検出しました。土器集積1は平安時代の土師皿を等間隔の穴に据え置いたものです。近くには火床とみられる穴も確認しました。土器集積2は土師皿2枚を口縁部で合わせ口にしたもので、それを5組集積して置いた遺構です。

石列は2区の北壁付近で検出しました。石列は東西に4m分確認できました。石列は人頭大の石を2～3段に積み上げ、南側に面を揃えて並べています。石列の方位は西でみて北に22°振れています。この石列は平成24年度調査で確認された砂利敷よりさらに下層にあることから、砂利敷よりも古い時期に造られたと考えられます。

調査区全体から土師器、須恵器、黒色土器、緑釉陶器、瓦、土馬、鉄滓、鞆羽口などが出土しました。平安時代の遺物が多く、それ以外の時代の遺物は少ないです。

まとめ

調査の結果、飛鳥時代から平安時代の遺構を確認することができました。石組溝は飛鳥寺西方に広がる砂利敷広場の排水や区画を示すための溝と考えられます。この石組溝の周囲にも砂利敷が施されていたようですが、平安時代の削平を受け残っていませんでした。また、土器集積遺構は平安時代における寺院周辺祭祀とみられ、少なくとも2回以上行われていたことも明らかとなりました。そして、砂利敷よりも一段階古い石列を新たに検出し、広場以前における土地利用の一端を明らかにすることができました。今回の調査によって、飛鳥寺西が飛鳥時代から平安時代にかけての儀礼・祭祀の場として利用されていたことが判明し、土地利用の変遷を明らかにすることができました。

飛鳥寺西方遺跡



2016年2月
明日香村教育委員会

